

### ③4 曹操の華北統一

後漢・建安十二年(二〇七)年

袁紹が病死すると、その勢力は急速に衰えた。袁紹には三人の息子がいたが、長子の袁譚と末子の袁尚による後継ぎ争いが起きたのである。袁譚と袁尚が争う中、曹操はしだいに袁氏の勢力を衰退させていく。

『演義』は、その原因を袁紹の妻に求める。袁紹の後妻の劉氏は、自らの子である末子の袁尚を後継者とすることを瀕死の袁紹に迫った、とするのである。

袁氏の拠点であった冀州が陥落した際には、中子の袁熙の妻であった甄氏を曹操の長子曹丕が略奪している。曹植が憧れたという、のちの甄皇后である。

建安十一年(二〇六年)、曹操は、袁尚と袁熙が最後に頼った烏桓族に遠征し、これを征服した。郭嘉が強く勧めたためである。郭嘉は、「軍は神速を貴ぶ」として輜重を留め置き、軽装の兵により倍の速度で烏桓の不意を衝くことを献策、曹操に勝利をもたらした。

袁尚と袁熙は、なお遼東に逃れたが、曹操への接近を考えていた公孫康に殺害され、袁氏の勢力は一掃された。こうして河北を統一した曹操は、いよいよ長江流域に進出、中国統一を目指すのである。

### ③5 赤壁の戦い

後漢・建安十三年(二〇八年)

曹操の率いる数十万の軍勢に対して、周瑜と程普の指揮する孫呉軍はわずかに数万、この劣勢を覆したものが、黄蓋の献策であった。黄蓋は、曹操の水軍の密集ぶりを見て、投降を装い、焼き討ちをかけることを進言する。『演義』では、周瑜と諸葛亮の発案とされる火攻めは、黄蓋が考案したものである。『演義』はその功績を取り上げる代わりに、黄蓋が投降する際に、わざと周瑜に罰せられ曹操に投降を信じさせる「苦肉の計」という虚構を創作している。なれない水戦に不安があったのであろうか。あるいは、孫権の一族が内応を申し出たため、油断したのであろうか。曹操は、黄蓋の偽降を信じた。

建安十三年(二〇八年)十二月、黄蓋は先陣を切って船を出す。快速船十隻に、枯れ草や柴を積み込んだ黄蓋は、折からの東南の風によって曹操軍に近づき、兵士たちに「黄蓋が降服する」と叫びさせた。曹操軍まであと二里の距離で黄蓋は、船に満載した枯れ草に火をかける。激しい東南の風にあおられた船は、炎の矢のように曹操の船団に突入する。火は、船を焼き尽くして陸上の陣をも襲う。黄蓋に続いて周瑜も、精鋭部隊を率いて上陸する。

江陵に曹仁と徐晃を、襄陽に楽進を残した曹操は、許に帰還する。赤壁の戦いは、曹操の大敗に終わったのである。

